

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

会報

Forum for Furusato Kasugai Studies

NO. 53

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

2017. 6. 30発行

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

編集責任：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第53回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ 『「私たちの町」 稲口の人物—吉田源應について—』

平成 29 年 7 月 2 日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ『「私たちの町」 稲口の人物—吉田源應について—』と題し、延暦寺天台座主となつた吉田源應(げんおう)氏について後藤清勝(書家の号は幽泉)氏に講演していただきました。

書家後藤幽泉氏の作品は新春日井駅舎の南北自由通路に展示されています。東京都知事賞・グランプリ受賞者でもあり、第 19 回準大賞(漢字部)を受賞されている。ちなみに第 1 回の準大賞受賞(詩文書部)者は野崎幽谷氏である。また、日中現代書展を 2 年に 1 度開催し、1998 年以来日中交流活動を続けられている国際的な方である。地元での活動では、2011 年から文化フォーラムでかすがい市民財団の昼涼みプロジェクトを続けられています。「子どもに芸術体験を」がそのテーマ。「書に親しむ講座」(ルネックで)の開催など地元密着の取り組みをされています。稲口開墾の歴史と稲口の人物についてよく調査され、また、地域の人たちや子どもたちに受け継がれることを願った活動を続けられており、私たちにも教えていただくことになりました。後藤氏は 2000(平成 12)年 3 月発行の『私たちの町 いなぐち～新田開拓 350 年記念誌 1999 年』(稲口町内会発行、700 部)の記念誌部の部長を担当され、約 2 年かけて調査されこの記念誌の内容一部と四天王寺から独自に入手され『天台座主大僧正源應大和尚行状記』をもとに源應の略歴を紹介していただきました。

フォーラム参加者は、21 名でした。



—発表要旨—

I 「私たちの町」いなぐちの人物 a. 江戸時代初期、春日井郡稲口の新田切り開きをし



た吉田兄弟 **(1) 吉田市左衛門** … 江戸時代初期、生没不明だが、濃州稲口(関市稲口)の吉田九郎三郎の子。兄弟の半右衛門、半兵衛、甚六、与治右衛門、他女二人と共に尾州春日郡稲口村の新田切り開きに来たと思われる。(春日郡は春日井郡) (関市にある梅竜寺の過去帳をもとにした家系図下書きに) 養父の各務久右衛門には一人娘しかおらず、武儀郡岩佐村から吉田九郎三郎を養子に迎えた。各務の姓を継がず、吉田をそのまま使った。二丁目に市左衛門の子孫は不在。

(2) 吉田半右衛門 … 兄弟姉妹で新田切り開きに来た一人。二丁目に直系子孫が残る。 **(3) 吉田半兵衛** … 現在の家系筋は不明。 **(4) 吉田甚六** … 現在の家系筋

不明。 **(5) 吉田与治右衛門** … この人が稲口町の開祖とされ、二丁目に本家筋が残る。

b. 稲口出身で天台宗中興に尽くし、2度も天台座主になった**(6)吉田源應** (嘉永 2.6.10～昭和 2.7.2) … 稲口町二軒屋(現四丁目)の人。万延元年 12 歳の時、龍泉寺に入り出家。天台宗の中興に寄与した。竜泉寺・密蔵院・瀧の坊などの住職をするかたわら、県下各宗取締役議員や所長に当選し東奔西走、仏門のため善処努力した。以後も、総本山延暦寺幹事となり、天台宗宗務庁に入り要職を務めた。明治 22 年 2 月大阪四天王寺住職となり、明治 31 年 50 歳にして大僧正に進んだ。天台宗西部大学長・中学長に特任、兼務して指定の教導に当たった。その他、善光寺・妙法院の興隆に努め、その功績は大であり、特に日常の生活を儉約し、四天王寺女学校を設立し自ら校長になり、女子教育に貢献した。学徳兼備の名僧として徳風高く、祖山中興の祖として名声を高め、また郷土には八田川に天王寺橋を架け交通の便を図った。昭和 2 年 7 月 25 日入寂。慈是心院探題大僧正源応大和尚。

c. 地方自治のために尽力した従兄弟の**(7)吉田与一郎**(嘉永 2.11.20～昭和 3.3.1) … 稲口町東屋敷(現二丁目)の人。養蚕業の研究をよくし、村内に普及させた。稲口新田副戸長・春日井村村長・勝川町町長など務めた。当時の勝川町は春日井、勝川、味美、柏原の地域。

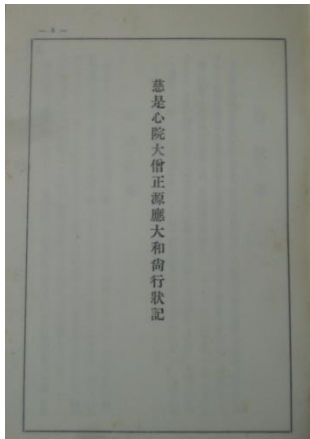


源應の義理の兄で地元の文化向上に尽くした**(8)吉田善弥**(安政 5.3.2～大正 12.11.18) 稲口町二軒家(現四丁目)の人。17 歳で稲口新田副戸長。度々村長、町長に選ばれ、地元の地位向上に尽くした。青少年に茶華道を教え、村民の文化向上に尽力。柿の葉寿司をつくる柿の苗を大阪から取寄せて屋敷内に柿畑を作った。大正 4 年に宮内省に献納したと伝わる。

II. 吉田源應大僧正の略歴

第 242 代と第 245 代の天台座主を勤めたが、この方の年譜を知る資料に乏しかった。『天台座主大僧正源應大和尚行状記』を入手され、その中に「慈是心院探題大僧正源應大和尚略年譜」が載る。「群書類聚」の補任歴任記には座主 167 代までしか載っていない。一般の人が目にできるようになったのは「校訂増補天台座主記」(1999 年、合冊)が第 247 世まで載るようになってからである。ただし、春日井図書館にはない。

- 0 歳・1849 年 尾州稲口新田村、吉田與八郎長男として誕生
- 12 歳・1860 年 龍泉寺行應阿闍梨に弟子入り
- 16 歳・1864 年 密蔵院で入壇灌頂
- 17 歳・1865 年 龍泉寺住職
- 23 歳・1871 年 熱田瀧之坊住職
- 25 歳・1873 年 權少講義、10 月より東海北陸を巡回説教
- 27 歳・1875 年 篠木村密蔵院住職、尾州岩屋寺住職兼務、愛知県各宗派総代
- 29 歳・1877 年 天台宗大教院議事課詰
- 31 歳・1879 年 權大講義
- 32 歳・1880 年 天台宗大会議原案委員、兼書記、東京勤務
- 34 歳・1882 年 大講義
- 37 歳・1885 年 愛知県各宗派取締集議所長として勤務
- 38 歳・1886 年 総本山延暦寺幹事
- 39 歳・1887 年 權僧正(2 月)、大阪四天王寺副住職(8 月)
- 40 歳・1888 年 総本山延暦寺寺務所文書課長、同寺務所長
- 41 歳・1889 年 密蔵院・岩屋寺住職を退き、四天王寺管主、僧正
- 42 歳・1890 年 大阪正善院住職を兼務
- 44 歳・1892 年 永年の宗務勤務の功により望擬講に推される
- 45 歳・1893 年 四天王寺に聖徳太子頌徳会を設立
- 47 歳・1895 年 權大僧正
- 48 歳・1896 年 瀧之坊住職を兼る
- 50 歳・1898 年 大僧正、日泰寺住職を兼務
- 52 歳・1900 年 天台宗西部大学長・中学長
- 55 歳・1903 年 第 242 世天台座主(11.2) 延暦寺住職宗則により「国師」の徳号を受ける
- 56 歳・1904 年 「国宝」の徳号を受ける、天台座主を降りる(10.19)
- 57 歳・1905 年 天台宗西部大学長・天台宗尋常中学長再任 以後 73 歳まで本山戒蔵院、本山浄泉院、大正善院、勝曼院、施工院、善光寺別当大勧進寺、密蔵院、瀧之坊等の住職を期限を切って兼務



62 歳・1910 年 総本山延暦寺顧問になる

70 歳・1918 年 再び天台座主(245 世)、延暦寺住職

79 歳・1927 年 心臓麻痺にて遷化(7.25)

㊤大正 11 年に四天王寺女学校を作ったがすぐに亡くなった。

㊤吉田源應は一生を独身で過ごした。最後の弟子秀映を養子とし、英哲→明良吉田家を継いでいる。

㊤墓所は大阪四天王寺内に吉田家として、同所に歴代貫主として、比叡山の慈堂内に歴代天台座主として、計 3 ケ所ある。

Ⅲ. その他 … 吉田兄弟が慶安 3 年(1650)(8 年後の万治元年という説も)に春日井の稲口に来たとさるが、ある日突然にというよりも、何度も行き来して足場を固めた後に定住しのではないか、親の九郎三郎も手助けに来たのではないか、また、娘二人の嫁ぎ先は美濃稲口と春日井の稲口の間にある小口(おぐち)稲口で、ここが春日井の稲口に往復する来る中継地であったのではと推測されている。市左衛門が小口稲口に越した時には、すでに入鹿用水が完成(1633 年)していた。入鹿池が慶応 3 年(1868)の決壊で死者 105 名を出しており、小口村は消えたことなど、丹念に調べられている。稲口町の人口推移や稲口新田の石高、水飢饉のあった明治 7 年 2 月の物産表(米、大麦、小麦、粟、桑、稗、菜種、生綿、大豆、小豆、さつま芋の収穫高を集計した戸長役場の資料)、新田の呼び名の変遷も紹介された。

最後に、記念誌に「親から子に聞かせる童話」として「源應さんと天王寺橋」の童話が 350 年祭委員会の作として載る。これを受け継ぐように、稲口町では、子供会用「稲口町いろいろ」全 10 話の「へーえ! そうなんだ!!」を 1 年に 4 回発行している。「むかしは…」の話は小学 1 年生から中学までに 2 回読むことになる。10 年後には「稲口検定」をする目標を持つ。

OPINION

『ふるさとの歴史・文化を引き継ぐことの意義』

— 効率よりも文化・歴史を重んずる発想 —

経済合理性や効率を最優先して資本主義経済は発展しています。所謂「資本の論理」が法則的に循環することによって、経済規模は拡大し、比例して人々の暮らしの経済も成長拡大して「豊かさ」を享受することができています。日本では、高度経済成長時代(1959~1990 年頃まで)に当たります。その後も高度経済成長期と同じ循環モデルを期待したのですが、僅か 5~6 年で破綻を来しました。バブル経済の崩壊がそれでした。2007 年リーマンショックによる世界金融危機の到来は、従来の資本主義経済システムの見直しと、社会を構成す

る人間自身の倫理道徳観にまで及んで、本当の「豊かさ」とは何かを考えさせられる契機となりました。250年以上も前から経済学の祖 A. Smith は、道徳や法の在り方は、経済の在り方によって左右されると指摘していました。その後、J. Ruskin も人間社会の中における価値は、経済的価値（市場価値）だけではなく、「文化」「芸術」にも人間生活の中で享受できる「価値」（実効的価値）があるとし、創造的価値こそが人間生活を豊かにして行く手段であるとのべています。最近では、ホセ・ムヒカ（「世界で一番貧しい大統領」南米ウルグアイ前大統領）が消費に走らず「節度」を守ることが「幸福」に繋がることを説いています。

春日井の文化の特色は「書のまち春日井」と言われて久しいのですが、経済活性化の発想には至っていません。「書のまち」では経済効果は上がらないと言いきる実業界の人々や、文化・歴史では経済の活性化は無理であると説く学識経験者達の意識の中には、経済成長こそが活性化の前提であるとの発想が根強くあるからだと思います。今日の経済社会の流れは大きく潮目が変わって来ていることに気付くべきだと思います。

「文化スポーツ都市宣言」という新しいキャッチフレーズが春日井市の顔になりましたが、過去の歴史に学んで、歴史・文化・芸術・スポーツを地域活性化の手段として行くという主旨で積極的に税を投資してゆくというならば、大いに共感できる宣言であると思います。

「ふるさと春日井学」研究フォーラムは、一貫してふるさと春日井の「文化・歴史・自然」の特色や魅力を発信しそれを保護、保存、継承して行くことが地域の活性化に繋がり、そのことによって経済効果が創出されなければならないということを主張しています。

その地域にしかない、特色、魅力は、その地域の人々が古くから愛着を持ち、地域の拠り所であったり、シンボルになったりして今日存在しています。今全国で「地域の歴史文化遺産」として、再発見されて保存活動がおこなわれている現状は明らかに人々の意識の変化の現れとあってよいのではないのでしょうか。所謂「ふるさと意識」の広がりと言えるでしょう。

「経済効率より歴史文化重視の意識」を表す新聞記事 日本経済新聞「春秋」(2017. 7. 31)

2017. 7. 31

春秋

朝起きたら、日本橋の上に高速道路が架かっていた。東京の老舗が集まる東都のれん会のホームページで、栄太楼総本舗の細田安兵衛さんが前回の五輪前夜の思い出を語っている（「大旦那のちよつといひ話」）。びっくりしたよ。なんだこりゃ。ひどいねえって……。

▼そのころ、首都高は急ピッチで建設が進んでいた。用地買収の面倒が省けるからと、日本橋川の上を高架が這い、ある日、ルネサンス様式の石造りの橋をもその下に閉じ込めてしまったのだ。1963年12月のことである。五輪の開幕まで1年を切り、競技場も新幹線もモノレールも突貫工事に次ぐ突貫工事の日々だった。

▼顧みれば、つくづく悔いが募る。だから高速を地下化し、景観を取り戻す構想がたびたび浮上してきたが日の目を見ぬままだった。しかしこんどは本当かもしれない。国土交通省や都などが、2020年五輪後の地下化着手をめざして動き出すぞうだ。実現すれば、効率よりも歴史や文化を重んじた画期的な試みとなろう。

▼もっとも、歴史や文化がないがしろにされてきたのは日本橋だけではない。東京ではいままた、あちこちで突貫工事が進行中だ。日本橋再生は意味深いが、その価値観を広げていかなければ「かっこいいぞ。未来都市だな」とはやしているうちに、橋は高架下に隠れたぞうだ。

(文責：河地 清)

次回

「ふるさと春日井学」研究フォーラムのご案内

「ふるさと春日井」の魅力を再発見するFORUM

「ふるさと意識なくして地域の活性化なし」

「地域活性化・まちづくりの応援メッセージ」

Forum for Furusato Kasugai Studies

第55回 Forum テーマ：

『小野道風とは、どんな人物か』

日時：平成29年11月5日（日）午後1時30分～3時30分

場所：市民活動支援センター（ささえ愛センター）八幡小学校西側

TEL：0568-56-1943（〒486-0837 春日井市春見町3番地）

講師：塚田 忠雄 氏

「ふるさと春日井学」研究フォーラム 副会長

郷土春日井研究会会長・春日井郷土史研究会会員

フォーラム内容：

「小野道風」研究を続けて30年、地域に根付いた、歴史的閃きと、道風縁の地を隈無く踏破し現場検証した作業を、関連資料、文献の精査の中で、次々と真実に迫る新仮説を発表されてこられました。

従来研究の道風の「書的」分析研究ではなく、「人間道風」研究として、道風の新たな人物像が描きだされています。

今回は、今までの研究を整理された上で、市民が道風をどのように認識してきたのか道風公園を中心に身近にある道風縁の風景を紹介しながら道風像に迫る・・・・・・後はFORUMで

（非会員の方のみ資料代500円徴収させていただきます。）

※事務局：〒486-0825 春日井市中央通り2-9 TEL・FAX0568-82-5973 会長 河地 清

mail address:kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

[ふるさと春日井学検索](#)

